

コロナ

桑原 正紀

私たちがいままで使っていた「コロナ」という語の意味が、いまやすっかり変貌してしまつた感がある。

さくらなど見なくともよしコロナ禍のただ中にある医師らを思へば

新コロナひろがりミシンが売れるとぞマスク買へねば
手作りすると 神保 外子(埼玉)

今月号にもこういう歌が多く見受けられる。本来「コロナウイルス」の「コロナ」とは、ウイルスの形態が太陽のコロナに似ている特徴を強調した接頭辞と呼ぶべき語だ。

それだけが独立して用いられることはないはずなのだが、そんな小理屈はどこかにすつ飛んでしまった。作品の中でも、三月ごろまでは「新型コロナウイルス」「新型ウイルス」といったきちんとした表現が主流であり、掲出歌のような表現はかなり違和感があったが、このごろはむしろ「コロナ」と単純に言う方が多いかもしれない。

この「コロナ」という語が、「新型コロナウイルス」を

指す語として定着するスピードにはすごいものがあつた。まず人々の日常会話において「コロナ」で通用するようになり、そのあとを追うように新聞、テレビ等のマスメディアも「新型コロナ」「コロナ」と使うようになった。その変化はせいぜい一ヶ月ぐらいの間のことだつたらう。まさに本家のウイルスさながらに、この新用語はあつという間に広く伝播していった。

似たような思いをした語に「バブル」がある。三十年ほど前、経済の急激な高成長・好景気が三年弱で一気に急落していった泡沫現象をバブル経済・バブル景気と呼び、その的確さゆえにたちまち広まつた。今でも「バブルの頃はなああ」という言い方が、若い世代にも通用するほどに浸透し、定着している。

まことに言葉というものは柔軟で、最初は違和感のあつたものがどんどん市民権を得ていき、時には誤用でさえ通用していくようになる。私たち日々言葉に鋭敏であらねばならない者は、それらにどういふスタンスを取つていれればいいか、常に悩むところである。安易に飛びつけば軽薄な印象になるし、いつまでも拒絶していると堅く古い印象を与えてしまう。要はその言葉を生かして使っているかどうかという問題になるだろう。冒頭で掲出した二首も、今の外出自粛という日常生活を背景に、実感のこもつた使われ方をしてるので受け入れられるのだ。